

クチ、クチ、と言うのだ

ふと立ち止まって仰ぎ見ると、ポタラ宮ははるかな高みにそびえている。

垂直のベルサイユと呼ばれるポタラ宮は高さが一一〇メートル余り、東西の長さは三六〇メートル余り。白と赤茶色に彩色された独特の建築はぼつかりと高みに浮かぶ要塞のようであり、またその金色の屋根をいただいた壮麗な建築は見るものすべてを圧倒するような威厳をそなえている。マルポリと呼ばれる巨大な岩山にそびえるポタラ宮は「観音菩薩の住む山」を意味し、一七世紀後半から二〇世紀後半にかけてチベットを支配した歴代ダライラマの宮殿として、政治と宗教の中心としてチベット世界に君臨した。

今日はいよいよポタラ宮の見学ということで、朝八時に起きてヤクホテルを出たのはいいけれども、宮殿の入口が分からなくて頭上はるかにそびえるポタラの足もとあたりをウロウロするのだった。

たまたま見つけた公衆便所で小便をし、もう一度気を落ち着けて北京東路へと戻る。行き交う人々を見てみると、巡礼者らしい人々が目についたので彼らのあとをついていった。民家の間をしばらく歩いていくとやがてポタラの礎となっているマルポリの麓に出て、そこからは長い石段をどこまでも登っていく。空気が希薄なためかすぐに息切れがするの、ゆっくりとときおりは休憩しながら登っていった。

長い石段を登りきると、白宮に通じる門廊に至る。入場料は三〇元（FEC）。ちなみに中国人は八元だったが、素直に外国人の窓口に向かう。不思議なことだけれども、損だとか得だとかいう気持ちは起こらなかったのだ。ただそうなっていることには素直に従おうという気持ちがあった。ポタラ宮の威容と荘厳さがそういう気にさせたのかもしれない。ちなみにチケットを見ると、ポタラは中国語で『布連拉宮』だ。

チベット人巡礼者のあとをついて門廊を抜けると内庭に出る。内庭の正面には白宮がそびえている。白宮はダライ・ラマ五世によって造営された宮殿で、ダライ・ラマの居室を中心にして事務所や会議室などから成り、政治の中心としてのポタラの一面を象徴している。ちなみにダライ・ラマ五世の死後造営された紅宮は歴代ダライ・ラマの霊廟を中心とした宗教的な宮殿で、チベット仏教の中心としてのポタラを象徴している。

白宮内部には大昭寺造営のいきさつなどを描いた壁画があり、さらに急な階段を登っていくと、白宮の屋上に出る。屋上からはダライ・ラマ

の居室に入ることができず。チベット人たちや外国人観光客たちの行列に流されるようにして居室に入っていくと、様々な装飾に彩られた謁見室、ダライ・ラマ愛用の仏具などがそのまま残された勤行室。

ひととおり見学したあと、白宮の屋上で休憩した。屋上からはラサ市街が一望のもと見渡せる。彼方にそびえる山々や、ラサの南を流れるキチュ河の流れ。大昭寺のある旧市街のあたりには香木の煙だろうか、微かに白い霧のような煙がたちこめている。背後では、民謡のような、労働歌のような若い男女の軽快な歌声が流れていた。

白宮の屋上から紅宮の方へ歩いていると、所々改築の工事が行われていた。とは言っても何かの建築機械が動いているわけではなくて、若いチベット人たちが何人か一団になって踊りながら棒のようなもので地面（といっても屋上）を叩いているのだ。踏み固めるための作業だろうか。先程から聞こえていた歌声は彼らが発していたもので、その軽快な歌声や踊りの動作とともに楽しげな彼らの作業風景は心を和ませるもので、思わず僕は足を止めて見とれていたのだった。（ちなみにポタラ宮の改築工事は九四年の夏に完成し、主のないまま盛大な記念の儀式が行われた。）

紅宮に足を踏み入れると、薄暗い部屋ベヤの内部にはヤクバターの灯明がゆらめき、チベット人たちの行列に紛れて歩いていくと、突然のようには見慣れない立体マンダラや荘厳な歴代ダライ・ラマの霊塔、あるいは大小無数の仏像や仏画などが次々と現われ、僕は自分の位置を見失う。ガイドブックによると、紅宮の基本的な構造は四角い空間を囲んだ楼の積み重ねで、各階には四角い回廊を内側に囲んで多数の部屋が並んでいるということだけれども、とてもそのように整然とした建築というようには感じられなかった。人ひとりがやつと通れそうな木作りの階段を、登る行列と降りる行列とが鉢合わせながら通り抜けていく。動いたと思ったら立ち止まる行列。忍耐強く少しずつ進んで、ようやく御宝と御対面。それは見るからに巨大で荘厳な霊塔であったり、陳列された無数の經典であったり、小さな千体仏であったり、ソんツェン・ガンポ王とテイツン、文成公主の像であったり。それらはチベット仏教にほとんど知識のない僕にとっても、ただ驚くしかないように見事なものばかりだった。

薄暗い紅宮をようやくの思いで抜け出したとき、しかし僕は微かな違和感を感じていた。大昭寺をまわったときに比べて、外国人観光客の姿が多く、彼らはあたりをはばかりすることもなくカメラを撮ったりビデオを回したりしていたので、もしかしたらより観光物化されたポタラに違和感を感じたのかもしれない。また主のいないポタラはただ御宝ばかりが

豊富で、きらびやかで、宮殿というよりもむしろ毛色の変った博物館という印象を感じたのかもしれない。もちろんそういうことを僕は感じていた。しかし、より以上に僕が感じたのはチベット人巡礼者たちの様子だったように思う。大昭寺では彼らは親しみ深く、五体投地をするように、文字通りその身を預けるように巡礼する。しかしここポタラでは、彼らはある種の距離をとり、襟を正すようなのだ。大昭寺が旧市街にあり、ポタラはそこからかなり離れたところにある、という位置も関係しているのかもしれない。しかしそれ以上に、大昭寺（チヨカン）とポタラというのは重なりあいつつも異なる面を含む二種類の聖を体現しているのではないかと僕は思う。図式的に言い切ってしまうと、大昭寺（チヨカン）は政治の影を払拭している。そこには権威、権力的なベクトル、垂直性はあまり感じられない。聖は大らかに巡礼者たちを抱くよううだ。それに比べると、良くも悪くもポタラには政治権力の影（影というよりも、そのものなのだけれども）が付きまといっている。聖は垂直的なベクトルを濃厚に含み、従って、屹立するのだ。もちろんどちらが良いとか悪いとかいう問題ではない。おそらくチベット人たちにとってはこれら二つの側面を持つ聖は別々の聖ではなく、それらは分かちがたく結び付いたひとつの聖なのだろう。ただ外部の者、外国人旅行者としての僕にとつて二つの異なる側面を持つ聖として感じられ、それを僕は違和感という形で感じたということだ。

ポタラ宮の裏口を出て、マルポリの丘を麓へと下っていくと、坂道の所々には物乞いの人たちが座り込んでいるのが目についた。巡礼者や観光者の姿を見かけると、彼らは、

「クチ、クチ。クチ、クチ」

と言いながら、手を差し伸べるのだ。

あれがポタラなら、これもポタラ、と僕は漠然と感じつつ、ポケットから一角札を取り出して、あげた。しかし物乞いをしている人たちは多くて、すぐに一角札はなくなってしまった。女や老人の物乞いは道端に座り込んでいるのだけれども、子供たちは僕の姿を目にすると駆けよってきて、

「クチ、クチ！ クチ、クチ！」

と口々に発しながらどこまでもまといついてくる。あいにく一角札はなくなってしまったのだけれども、FECの一角札が何枚かあったので、それをあげた。

「はい、終わり」と考えながら、坂道を下っていこうとすると、おこぼれに預かれなかった二、三人の子供たちがさがるように、

「クチ、クチ。クチ、クチ……」

無視して立ち去ってしまうのもかわいそうな気がしたので、最後の子供たちには一元札をあげた。小さなお金はそれしかなかったからだ。子供たちは飛び上がってよろこび、坂道を駆け上がったけれども、あまり良いことをしていないというやましさのような感情がどこかであざいだのだった。

マルポリの丘の麓近く、ようやく物乞いの子供たちから解放されて、煙草を吸いながら坂道で休憩していると、黒いチュバに身をつつんだチベット人夫婦の参拝者が僕に向かって何事か声をかけ、

「休んでいないで、来い！ 来い！」というようなしぐさをする。おそらく北京路をはさんでボタラの南側の薬王山に建っているタクラ・ルプク寺へ行こうということだと分かったので、彼らのあとをついていった。

マルポリの丘を下りて北京路に出てみると、それを横切るようにして万国旗のような無数のタルチョが、マルポリの丘と薬王山との間に渡されて賑やかな風情だった。北京路に出ていた露店でマツチとアメ玉を買い、アメ玉を食べながらチベット人夫婦のあとをついていった。

タクラ・ルプク寺への参道にはマニ石を彫る人がいて、参道に座り込んで仕事をしていた。マニ石は小さいものは一〇センチくらいから大きいものは五〇センチくらいの平たい石で、それにチベット文字の経文が彫ってある。参拝者たちはこのマニ石を寺の周辺に捧げるのだ。男の背後には大小様々なマニ石が並べられていて、とても興味を持ったのだけれども、帰りに寄ることにして参道を登っていった。

しばらく山道を登っていくと、岩山にへばりつくようにして建っているタクラ・ルプク寺の姿が目に入ってきた。大昭寺やボタラを見た目には、それはこじんまりと、ひっそりと建っているように見えた。外国人観光客の姿もなく、チュバ姿のチベット人の参拝者たちが三々五々寺を出入りするのが見えるだけだ。

ときおり振り返って導いてくれるチベット人夫婦に従って階段を上って寺内へ。岩窟を利用した薄暗い室内にはヤクバターと香の匂いが立ちこめていて息が詰まるような気がする。岩窟を利用した堂の構造や岩そのものに彫り込まれた仏像などが土俗的な印象を与えた。鬼のような表情をした忿怒像やそれが人を串刺しにしているような像、あるいは男女神が向き合う合体像。それらはインドから中国、朝鮮を経由しながらある種の洗練をされ、また儒教的な倫理観によって濾過されつつ伝承された日本の仏教にはない具象性と身体性、倫理を突き破る過剰なエネルギー、あるいはある種の泥臭さを感じさせた。

ひととおり参拝をすませ、チベット人夫婦とも別れて、参道入口のマニ石屋さんのところへ。お土産に適当な大きさのマニ石をあれこれと物色していた。値段を尋ねると、一〇元だと言う。それが高いのか安いのか、僕には見当もつかない。手に取ったりしてしばらく思案顔でいたのだけれども、ふと先程のチベット人夫婦が通りかかり、あわててマニ石を置き、立ち上がって挨拶をした。それを見て、マニ石屋の男は僕が立ち去ると思ったのか、急に五元に値下げをしたのだった。男の勘違いに、ラッキーと思いつながら、マニ石を買った。

再び万国旗のようなタルチョが賑やかな北京路に出て、今度はそこからさらに西へと、北京西路をたどっていった。ラサ西端にあるホリデーインラ薩（拉薩飯店）を指指したのだ。というのも、カメラのフィルムが残り少なくなっていたのだけれども、市街では売っている店が目につかなかったからだ。外国人用の高級ホテルにまさかフィルムがないということはないだろう。それに本音を明かすと実はコーヒーを飲みたかったのだ。

北京西路はまだ新しい街という感じで、中国人の商店や食堂などが並んでいて、ときおりはホテルのような立派な建物も目につくのだけれども、全体にがらんとした印象だった。昨日一昨日とは違って、とても良い天気で、歩いていると汗ばんでくる。どんどん歩いていると街並は途切れて、ただ広い北京西路が続いているだけ、という様子。干し肉のおやつを食べながら歩いた。

だだっ広い空き地のような公園があり、その一角には茶店が出ていた。見るとテーブルには一様に白いボトルが置いてあり、チベット人の男たちはくつろぎながらボトルの飲物を傾けている。チャイを飲んでいゝのかな、と僕は思う。甘いチャイもいゝけれども、しかし今はやっぱりコーヒーと考えながら、公園の脇を通り過ぎる。

ホリデーインラ薩の付近まで来たとき、ふと見つけた小さな食堂には英語でカレーライスのメニューが貼り出してあった。ラサでカレーが食べられるのかと驚きながら、いそいそと入口から覗き込む。しかしよるこびもつかの闇、暗い食堂には客はなく、出てきた主人に尋ねると、

「米飯、没有！」

ホリデーインラ薩はもちろんなラサ一立派なホテルなのだけれども、客は少ないようだった。気後れしていても仕方がいゝので、大理石のロビーを渡り、服務員に尋ねてレストランへ。ちょうどお昼前後の時間帯だったけれども、客は僕ひとり。久しぶりのコーヒーをゆつくりと楽しんだ。ちなみにコーヒーは一〇元（FEC）、三六枚撮りのフジカラーは

三五元だった。街中では二〇元弱のフジカラーもさすがホリデーインで高いのだ。

ホリデーイン拉薩のすぐ南には、ノルブリンカがある。ノルブリンカはダライ・ラマ七世によって創建され、歴代ダライ・ラマの夏の宮殿として整備された。

宮殿にはあまり興味はなかったし、ポタラ宮を見学できただけで十分と思いつつも公園の方へ歩いていくと、思いが通じてしまったのか、宮殿は閉ざされていて、入れるのは公園部分だけだった。閉ざされた塀のすきまから見える宮殿のような建物に入れないのは残念だったけれど、少し疲れていたのも、休憩しながら公園をゆっくりと散歩した。

ノルブリンカのすぐ南には昨日行った西藏長距離バスターミナルがある。大通りに出てみると、ちょうど荷を運ぶロボの行列が通つていくところで、珍しい光景に出会って、立ち止まって行列に見とれた。

*

ノルブリンカからいったんヤクホテルへと戻り、シャワーを浴びたあとしばらく休憩した。昨夜のネパール人たちはすでに出払っていて、部屋には僕ひとり。

ホテルの部屋でひとりじっとしていると、なんだかとてももったいないことをしているような気になってくる。明日早朝にはいよいよこのラサをあとにするのだと思うと、なにか大事なものを見落としているような気になってしまふのだ。大昭寺を中心にした八角街のチベット人たちの賑わいの中に、もう一度入つてこようと思ひ立つ。それにラサ到着の日、なにも分らないままお参りをしたデョカンの仏像たちともう一度ゆっくりと対面したかった。

腹が減っていたので、まずは腹ごしらえをするつもりだったけれども、ヤクホテル隣の食堂ばかりでは芸がない。そこで適当な食堂を求めて、北京東路を旧市街のはずれまでたどり、そこから旧市街をぐるっと外まわりするように歩いて食堂を捜したが、適当な食堂がない。清真寺前を通り抜けて、結局沿河東路という大通りに面した中国人の食堂で食事をした。なすびと肉の炒めもの、卵スープ、それに米飯で一八元。とても高い食堂だった。せっかくラサにいるのだからチベット人の食堂で、とも考えたのだけれども、どうもヤクバターの匂いが印象としてこびりついて気が進まなかった。

食事をすませたあと、大昭寺の方へと戻り、あいかわらずの賑わいを見せる八角街をひとまわり。絵葉書大の仏像画セットを買った。釈迦牟尼

尼などの画は多少色彩的な好みの問題はあるけれども、僕たちにもお馴染だ。しかし後期インド密教に特有の神々、緑度母、白度母、という女神はその体の線もなまめかしく、また幻変静本尊、幻変怒本尊という男神合体神はエロチックで、僕はふと春画を手に入れたような気がしたのであった。（ちなみにそれはもちろん春画ではなくて、女性パトナーとの性的な行を取り入れた密教の代表的な神格のひとつなのだそうだ。）

香木の匂いが一段と強烈な大昭寺の門前へと至る。そこには相変わらず五体投地を続けるチベット人たちの姿があったけれども、参拝時間を過ぎてしまったのか、門自体は閉ざされていた。もう一度デョカンの参拝をしかつたので残念だったけれども、仕方がない。午後遅く、まだ日差しは厳しく、広場に面した建物の陰で休憩した。

煙草を吸いながら大昭寺の方にカメラを向けたりしていると、チベット人の若者が声をかけてきた。中国語なのだけれども、意味がよく分からなくて会話にはならない。手にした袋のヒマワリの種をひとつかみくれ、たまたま通りかかった若者を紹介してくれた。言葉も通じないまま、しばらく僕のカメラをいじったり、僕が向けるカメラに収まったりした。

広場にはいつやって来たのか、チベット人の家族の大道芸が始まっていた。父親らしい男が胡弓を弾き、母親が歌い、まだ幼い娘がそれに合わせて踊る。何人かが彼らを取り巻いて眺めていた。興味を引かれたので観衆の輪に入ってしまった。チベットの民謡なのだろうか、歌はもちろん馴染のないものばかりだったけれども、その軽快な音楽や、幼い娘の可愛らしい踊りは楽しめるものだった。ただポロ雑巾のような彼らの身なりには少し胸が痛んだ。しばらく大道芸を楽しんだあと、何人かのチベット人と同じようにして投げ銭入れに、二角札をしのばせた。

夕方に近い時間だったけれども、まだまだ日は厳しくて、僕は歩き始めた。どこかの茶店でチャイでも飲みながら休憩しようと思ったのだ。広場を横切って通りに出ようとすると、運良く広場の片隅に民族レストランというのがあった。それは建物の二階にあって、テラスのような感じの店だった。階段を上って店を覗くと、チベット人ばかりの客のテーブルには公園の茶店で見かけたのと同じ白いポトルが並んでいる。

出てきた女主人に、テーブルを指差しながら、

「チャイ？」

と尋ねると、

「チャンだよ、チャン」

と言うように言葉を投げ返し、奥の部屋に並んだ大きな土の樽を指差すのだった。そして僕は思い当たる。チャイではなくて、チャンという名のチベットの酒なのだ。一リットル以上も入りそうな白いボトルは二元、大きなコップに一杯で一元。あまり酒に強い質ではないのでコップの方を注文し、前客に場所を空けてもらって腰を下ろした。

チャンはちよつと酸味のある白い酒で、アルコール度は低くて清涼飲料のようにおいしく飲めてしまう。隣はターバンのような赤い髪飾りをした男で、大きなナイフを得意そうに見せてくれた。飾りをほどこされた金属製の鞘を持つナイフで、四〇センチ程の長さがある。言葉はあまり通じないので、身振りと表情で感心した様子を見せると、彼はうれしそうにボトルからチャンを注ぎ足してくれるのだった。かたわらでは女房らしい女が笑いながら見ていた。

言葉はほとんど通じないので、しばらくすると男たちはそれぞれの会話へと戻っていき、僕はひとりチャンを飲んでいただけけれども、コップのチャンが少なくなると誰かが自分のボトルから注ぎ足していくので、チャンはいつまでもなくならないのだ。

結局何杯分のチャンを飲んだことになるだろうか、一時間ほど酒場について、たまたま隣の男が立ち上がったのを機にして僕も店を出ることにした。

清涼飲料のように軽い酒なのだけれども、もともとアルコールには強い質ではないので、まっ赤な顔をして、フワフワした足取りで旧市街の裏道を通ってヤクホテルへと戻った。

ヤクホテルのベッドに横たわり、靄のように立ちこめ、微かに流れる酔いに運ばれるようにして、僕は民族衣裳とファッションのことを漠然と考えていた。もちろん民族衣裳という言葉で僕が思い浮かべていたのは、チュバと呼ばれるチベット人たちの衣裳だ。

大昭寺前の広場などで見かける娘たちのチュバはこぎれいで、それぞれの着こなしもあるのだろうし、同じチベットでも地方によって服装は一樣ではないようだけれども、大体において僕たちはそれを区別することはできない。老いも若きも（といってもチュバ姿の男はラサでは少ない）が同じチュバを着て、多くは着たきり雀のように僕には感じられた。チュバはかなりごつい布でできているようで、ラサに着いた日には天気が良かったこともあって、ずいぶんと不合理な着物だと感じたのだけれども、実は高度三五〇メートルを越えるチベットには一日の間に四季があるのであり、むしろそれが正解なのだ。いやそれ以上に、チベットという風土と一体の着物だと言える。それを僕はデヨカン巡礼から

の帰り道、沿河路に続々と続くまるで難民のようにも感じられる巡礼者たちの姿を見たときに感じた。おそらく適当な宿もないだろう巡礼の旅をするのには、ドテラのようなチュバがふさわしい。チュバは風土なのだ。あるいは長い時間の経過の中で、チベット人たちがつくりだしてきた風土への適応なのだ。そしてチュバはもちろんそれだけが孤立した着物ではなくて、彼らの仕事、宗教、生活のすべてが一体となった適応なのだろう。それは風土的な民族（近代的な民族主義とは何の関係もない）を表わす。彼らはチュバを着て、いわば風土を、そして民族を着ている。それはまるで皮膚のように彼らに密着し、また浸透する。それは取替え不可能。彼らと民族と風土とは血でつながっている、いわば具体的に一体なのだ。

それに対して、僕たちが着ているのはファッションだ。なにもファッションモデルのように服装に気を使っているという意味ではない（ここで僕が考えているのは流行としてのファッションとは違う）。誰であれ、僕たちの社会では服装のTPOということを考えざるを得ない。会社ではセビロ、工場では作業服、寝るときは寝巻き、運動会ではジャージ、というように僕たちは時と所とに応じて服を変える。それはそのようにして僕たちが相手に対して、そして自分自身に対してそのような情報を発し、また受け取っているということだ。もしもそのような情報の交換が存在しないならば、寝巻きを着て会社へ行っても問題ではないし、動きやすさの面からいえばむしろ合理的かもしれない。ファッションの条件とはこのような交換（選択）の可能性とその情報性にあると思う。そしてファッションをまとう僕たちにはあらわになるのが「私」という選択者、そして裸体としての「私」なのだ。しかし「私」というのは奇妙な現象だ。ファッションをまとう「私」、裸体としてあらわになった「私」というのは実はそれほど確実なものではない。

ファッションをまとう僕たちはいわば役割としての僕たちだ。様々な役割のパッチワークとして僕たちはあるのだけれども、その中心に僕たちはこれら偽物あるいは本物の「私」を演じている本物の「私」というものが存在しているかのように感じている。そして僕たちはあるとき、役割というものをひとつひとつ脱いでいこうとする。しかし玉ねぎの皮を剥いていくように、役割を脱いでいくとともに、また「私」は手の平をこぼれてしまうのだ。そのように「私」は奇妙なことに消えてしまう。そのとき僕たちは一切のファッションを脱ぎ捨てた「私」つまり裸体というものが実はあらゆるファッションの劇場であることを知るのだ。「私」が劇場（裸体）の持ち主である、いや「私」とは劇場そのものなのだということは意味をなさない。問題はそこでなにが演じられる

か、なのだ。モノとしての劇場（裸体）そのものには意味はない。何事かが演じられる場としてのみ裸体としての「私」は生きるのだ。つまり「私」というのは役割として演じられることを通してのみ存在しうるのであり、すべての役割を脱ぎ捨てた実体としての「私」が存在するわけではないのだ。一見単純に存在するようにも感じられる「私」というものは実は様々な役割としての「私」が焦点化された写象、遠近法的な幻影に過ぎないものかもしれない。劇場としての「私」において様々な役割としての「私」が分裂しつつその支配を競い、あるいは遠近法的な像としての「私」と攻めぎあい、あるいは記憶としての「私」、あるいはそうであってほしい像としての「私」と攻めぎあう。

僕たちはそれぞれがこの世界に対して折り合いのつかない程度に応じて旅を求める。絶えず揺らぎながら確定することのない遠近法的な幻影に対して、いわばそれを支えてくれるある『理由』を求めて。それを「本当の私」と呼んでもいいだろう。様々な役割としての「私」と遠近法的な幻影としての「私」との予定調和。だが僕にはそのようにして得られるかもしれない静的な「本当の私」像よりもむしろそのプロセスの方に「私」としての切実さや手ざわりはあるように思われる。いわば実像や実体として完成した瞬間にかき消えてしまうもの。一見明確のように見えて、それを捉えようとすれば、無限の自己言及にならざるをえない。つねに動性のうちにしかかいま見えないもの。

僕という存在はなんと抽象的で、またやっかいなものなのだろう。しかし、誰しも僕たちはその抽象性でもいうものを生きなければならぬ。もう僕たちは戻るわけにはいかない。強いて戻ろうとすれば、それは民族主義にしかないのだ。

社会の進展、あるいは次元は違うけれども個々人の人生というものは絶えず後戻りができないように展開していくもののように思われる。それは時間というものがさかのぼることができないものだというところもあるし、生物学的あるいは社会的有機体というものがそういう性質をもっているのだということもある。（もちろん、とは言っても、進化というものは決して一元的な価値に収斂するものでも、一元的な原因によつて脱明されるものでもない。）そしてふと立ち止まり、うしろを振り返るとき、そこに僕たちは今日よりも自然で、今日よりも生き生きとしていた自分や社会というものを発見するのだ。そして僕たちは過去を郷愁する。しかし注意しなければならぬことは、過去とは存在しないものことなのだということだ。過去はない。あるのは記憶だけなのだ。僕たちは過去が存在したという記憶と、過去が存在するということを往々にして取り違える。過去を振り返る僕たちの心情が郷愁だというの

は、それが記憶をなぞっているにすぎないからだ。そして郷愁は現実をはぐれる。善し悪しは別にして、あらゆる言脱が主義となるのは現実との距離においてだ。自然に帰る、自然な生活、自然をテーマにした多くの言説にどこかいんちき臭いところがあるのは、僕たちにとって主義でしかありえないものを自然と言いつくろうところにあるだろう。過去が存在しないものであるように、自然もまた存在しないのだ。

ここまで来て、僕はチベット人たちの暮らしというものがその風土、民族と一体となったものだという先の見方を修正しなければならぬ。チベットに限らずあらゆる先住民、伝統的な暮らしを営む人々のことを、テレビをはじめとするメディアは「自然に帰る」僕たちの郷愁に訴えてロマンチックなイメージで飾り立てて伝えている。そこからなんらかの教訓やメッセージを受け取ることは大切なことだ。しかしロマンチックなイメージにまとわれた視線は、そのことに自覚的でないならば対象を見誤るだろう。チュバを発端にした僕の思考もまた外国人旅行者としての外部の視線によるものに他ならない。チベット人たちにとって、あるのは現実なのだ。現実という言葉の意味はここでは留保しておくとしても、それは「その風土、民族と一体となったチベット人たちの暮らし」というロマンチックなイメージを拒絶するものであることは確かなのだ。

夕方、午後七時頃。ひとりの部屋でベッドに横になってぼんやりと物思いにふけっていると、新客の日本人が二人チェックインしてきた。彼らは格爾木（ゴルムド、ガールムー）からのバスに乗り合わせた二人組で、なんと二人とも大阪からやって来たと言う。日本からもこんなに離れたチベットのホテルの一室に、三人の大阪人が居合わせたわけで、単なる偶然とはいえ、少し不思議な気分がした。

二人が食事に出ると言うので、つきあって一緒にヤクホテル隣の食堂へ。午後遅くに食事をすませて腹は減っていなかったので、ビールだけを注文した。

食事していると、ヤクホテルの周辺を縄張りしている闇面替の女性がテーブルにやって来た。擦り切れるほどに着込んだチュバに身を包んでいる。ひとりが一〇〇元（FEC）を一五〇元と交換した。闇面替の女性が立ち去ると、今度は物乞いが、次から次へとやって来た。朽ちたポロのようなチュバを着た子連れ的女性。あるいは四、五才から一〇才くらいの子供たち。まるで食堂の前で順番を待っているかのように、続々と物乞いたちは来るのだった。最初何人かには一角札をあげただけけれども、きりがないので無視していると、いつまでもテーブルのかた

わらに立ちつづけ、何かお祈りのような言葉を眩きつづける。仕方なく一角札をあげるのだった。

五才くらいの少年たちがテーブルに来た。お金はもうないよ、というようなしぐさで答えると、少年は必死な様子で残りもののおかずを指差す。もうひとりの少年は米飯の残りを。他の少年はテーブルの煙草を…。

午後八時、まだ夕暮れ時の明るさだった。ひとしきりの会話や情報の交換を終えてしまって、僕たちはそれぞれのベッドでそれぞれの旅の計画について、あるいは旅そのものについて思いを巡らしていた。